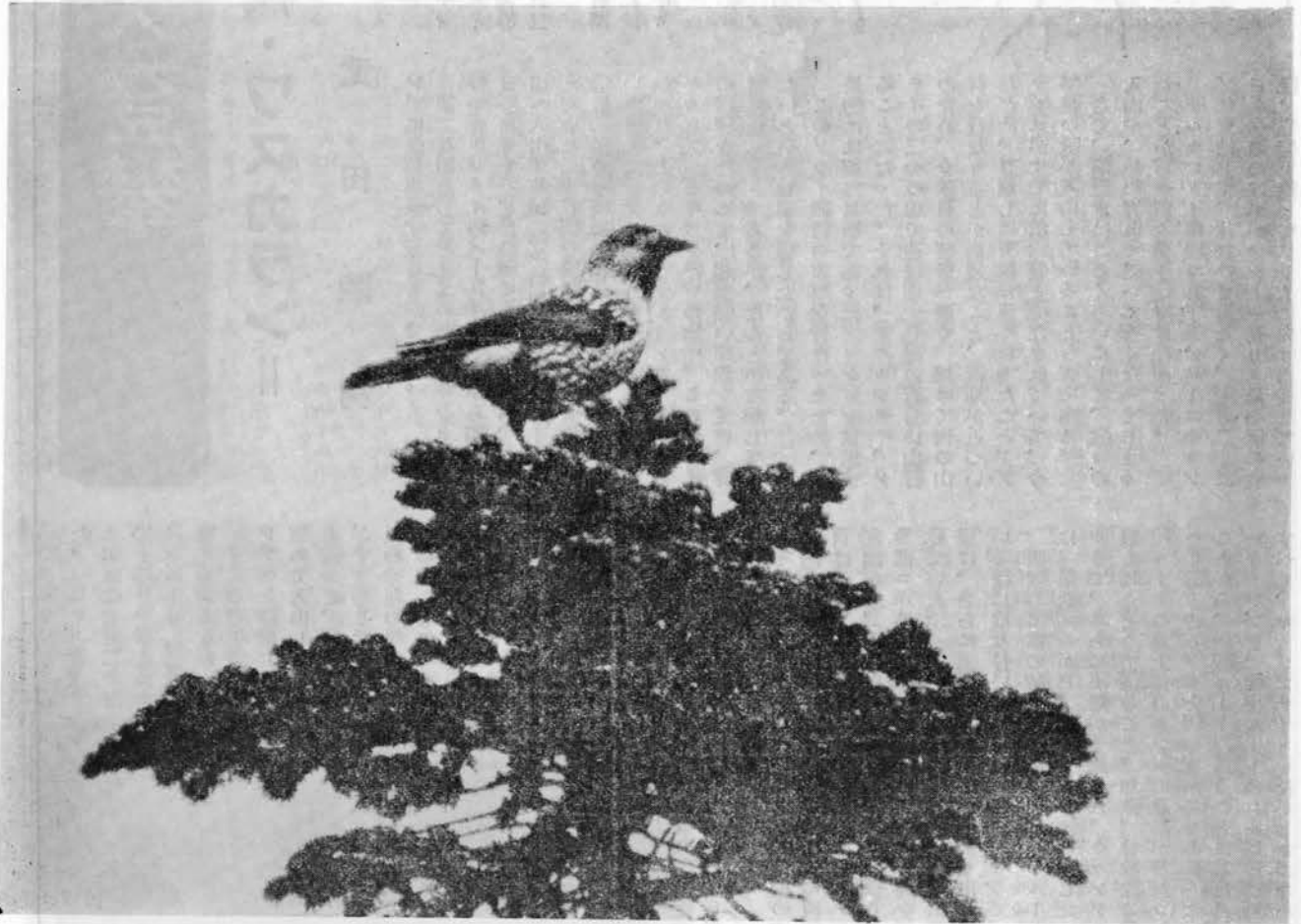


山と博物館

第13巻 第11号 1968年11月25日 大町山岳博物館



来年の夏

信州に冬はかけ足でやってくる。北アルプスの頂はすでに白くおわれ、その姿も日毎に白さが増すようにみえる。

雪こそないがこゝ大町の朝夕の寒さはきびしい。その中で爺ガ岳で現地飼育したライチョウ十羽はすでに九〇%以上白くなり、ケージの中を元気に活動している。

七、八月の低地の気温の最高時に育雛に失敗して五年。今年は例年の失敗の時期を高地でと、六月から爺ガ岳に入山して九月まで延三七〇人を動員して現地飼育が行なわれた。

そして、九月十八日と二十四日の二回において、ライチョウは低地の博物館に移されたが、九月とはいえ日中には気温が高くなる。温度計の一日盛一日盛に職員は神経を尖らせ一日も早く気温の低くなる秋が、冬がきてくれるよう願った。

現在はヒナも親鳥とみわけがつかない位に成長している。待っていた冬ももうすぐそこまできている。

だが冬が過ぎると春がき、春の次には夏がやってくる。来年の事を云うと鬼が笑うというけれども来年の夏を考えると頭が痛い。最低限の人工気候室でも二〇〇万円以上、貧乏な博物館には縁の遠い数字である。

成長したヒナはやがて、ツガイ期を迎え、それぞれのツガイになり産卵・抱卵・育雛の時期を迎えることだろう。

低地のケージの中で元気に育つ白いライチョウをみるにつけ、何んとかして人工繁殖をさせてやりたいと思う。

人工気候室がほしい、それがためなら、来年は夏がきてほしくない……

アンデス登攀

ソライ南稜・ワスカラン

武田 睦男

ソライ南稜の登攀

私達のアンデス遠征隊の計画は、コルデイエラ・ビルカバンパ山群中のサルカントイ(六二七〇呎)南稜、ブマシヨ(六二五〇呎)その他の三つのブロックに別け、それぞれ二十日間の登攀予定を組んだ。

その主目標のサルカントイ南稜は二十日間の苦闘の末、七月十七日、ついに初登攀に成功し、インカチャリヤスカ峠下のベースキャンプ

ンプに全員集結することができた。

第二目標として考えていた、ブマシヨはこのサルカントイのベースキャンプから四〇五日のキャラバンが必要であることから、この山へ入山する前に「その他」としてフリーに考えていた二十日間を隣接するソライ(五八三〇呎)峯の南稜につき込みようではないか、という隊長の言葉に誰も異議を唱える者はいなかった。というのは、サルカントイのベースキャンプへのキャラバンの途中、このソライの南稜をながめて、相当強い印象を受け、非常に敵しやうであるが、なんとか攻撃してみたいという欲望を感じたからである。

このソライ南稜の攻撃を行なったため、結果的には第二目標であったブマシヨを放棄することになった。それは、サルカントイ、ソライの二つの山で連続四十日間の苦しい山行のため、全隊員の疲労が濃く、続けて次の山行を行なうことが無理なこと、雨期が近づいたため、日増しに天候が悪くなったこと、ブマシヨがすでに第六登までなされていたこと、今年他の隊が入山していることなどである。

さて、前置きはこのくらいにして、我々の入山が、船の遅れでだいぶ遅くなってしまったことから一刻も猶予はできなかった。

サルカントイ南稜を終了し、ベースキャンプに集結して、休むひまもなく、七月二十二日先登隊の二名がテント一張りとも最小限の食糧、装備を持ってソライに向け出発していった。

た。

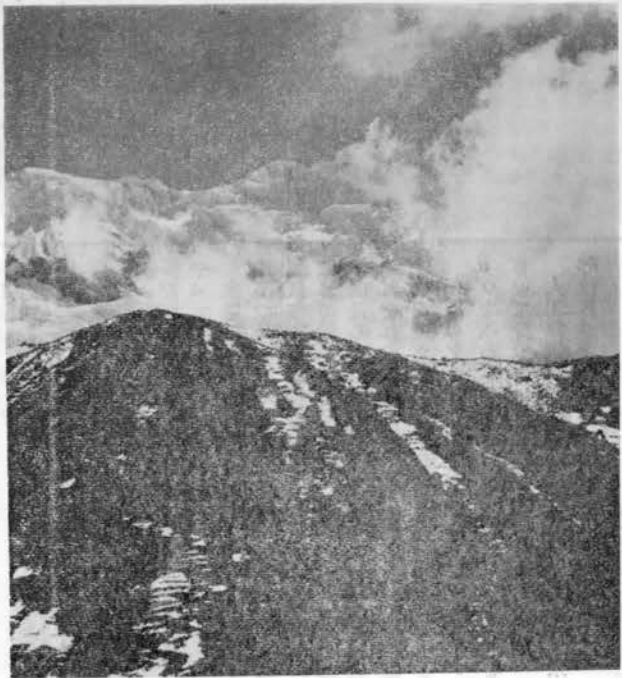
本隊は七月二十三

二十四日、ムーラ(ロバとムーラの混血種)の到着を待ってソライのベースキャンプへと移動した。

初めて入山したときと違って、高所順応がすっかりできていたので足の早いムーラの後からついて行ってもちっとも苦しさは感じられずむしろ楽しいものである

ソライのベースキャンプは四一〇〇呎(草原)の上部分にあるので、ときどき牛が草を求めては、キャンプの近くまできてのどかな風景を見せ、疲れた心に安らぎを与えてくれる。

七月二十四日はいよいよソライ南稜の本格的な攻撃が開始された。牧野、朝日の両隊員は、ベースキャンプのすぐ上のモレーンの左端から、南稜に延びているルンゼを登り、最低コルにて、コル直上の岩峰に苦闘を続けていた。一方、加藤隊長、曾我隊員の偵察隊は、さらに上のコルの下方から張り出して



ベースキャンプよりソライ峰

いる稜に取り付いた。

両隊の偵察の結果、牧野、朝日隊のルートは、最低コルから、加藤、曾我隊の達したコルまで、さらに困難が予想され、キャンプの数も増えやうであること。加藤、曾我隊の雪稜ルートの最上部のルンゼの登高が最低コルへの登りのルンゼと困難度があまり変らないことから、雪稜ルートを探ることになった。第一キャンプを、雪稜ルートのコル周辺に設営すべく、キャンプサイトを探したがなかなか

良い場所が得られない。コル上方の岩峰までも、ついに良好な場所を見つかることはできなかった。ベースキャンプから一日(四〜五時間)程度の行程を考えた場合、コルに作ることに一番良いだろうということになり東側の急斜面に雪を切り取って、ようやく五〜六人用のテント一張りを張れるだけのスペースを作り、第一キャンプを設営した。

七月二十六日、第一キャンプ(四九五〇呎)を建設してから、第二キャンプの建設は比較的順調に進んだ。第一キャンプから、第二キャンプまでの約三分の二は、ナイフエッジが続き、上部の三分の一は広い尾根となっている。

このソライの南稜のナイフエッジも、サルカントイの南稜のナイフエッジくらいに困難さがあったが、サルカントイでの成功が、隊員の中に相当な自信を植えつけ、また高所順応が完全にでき上っていたので、ぐんぐん上

サルカントイ・ソライ周辺



部への開拓が進んだ。
 七月三十日、ソライ部落上部から延びていくごく小さな尾根とのジャンクションピーク直下の広い場所に、第二キャンプ(五三〇〇)を設置することができた。この頃には、ベースキャンプからの荷上げもほとんど完了し、ポーターのモラレス一人をベースキャンプに残し、全隊員が第一、第二キャンプへ入りよいよ最後の攻撃体制に入った。
 しかし、高度差五〇〇〇の第二キャンプから

ソライ南稜ルート図



第二キャンプから上部では、ナイフリッジの上に大きなブロックが乗っていたりして、相当手こずってしまったが、第二キャンプから四日間の苦勞の末、八月四日午後三時三十分頃に登頂に成功することができた。天候は隊員達に恵みを与えてくれた。視界はきかず、風雪すら見舞った。下降には相当な時間がかかり、途中から闇が訪れ、ヘッドランプの光を頼りによりやく第二キャンプへとたどり着いた。

ソライ南稜の登攀終了後二日間て全隊荷を撤収してベースキャンプへもどってきた。全隊員がムーラのくるまでの二日間、のんびり休養できたのは入山以来初めてであった。

下山

八月九日はいよいよ下山である。クスコまでは、入山路であるモエバタの村に下りて、自動車で行けば二日あれば充分であるが、変わった所をより多く見たいという意見が大勢を占めたので、サルカントイ峠から、リオ・サントテレサを下ってサルカントイ北側の街、サントテレサにでて、ここから鉄道でクスコに帰ることになった。一日目は出発が遅かったので、サルカントイ峠下のソヨロコチャパンバにキャンプを張った。モレーンの対岸は、サルカントイのベースキャンプを張った所である。

長男のロビン、娘のルシラ、使用人二人がムーラについてキャラバンに加わった。ワイラマチからは谷は狭くなり、雪のついた山は見えなくなってしまう、木が多くなり山腹は緑色に変化して、標高のだいぶ下がったことが感じられる。四日間のキャラバンで、サントテレサは標高一五〇〇〇で、亜熱帯の気候であるので非常に暑い。バナナやナランハ(サンキストに似たミカン的一种)などの果物は非常に豊富である。またコーヒの産地でありキャラバンの途中でもしばしば、茶色っぽい実をつけたコーヒの木を見ることができた。サントテレサからクスコまでは、日本人が作った軌道と日本製の列車が走っている。サントテレサから約一時間のところにインカ時代の城壁都市といわれる遺蹟がある。有名なマチユの遺蹟である。我々も四、五時間におたつて見物してまわったが、団体の見学者が多いのにはびっくりしてしまった。クスコへ

訪れる人のほとんどは、このマチユ・ピチュ見物が主だといわれるだけに列車もツーリストでいっぱいであった。

ワスカラン・ノーマルートの登攀私達はサルカントイ、ソライの登攀を終えてから、休養を兼ねてクスコ周辺やチチカカ湖周辺の遺蹟や多くの風物を見物しながら、約十日間の旅の後、八月二十一日、首都リマへと戻ってきた。

久しぶりに青木さんやエンリケ君に逢うことができ、元気で会えたことを喜びあった。翌二十日は、サルカントイ登攀中、大雪で遭難のニュースが流れたため、心配して下さった人達や日本大使館への挨拶や、一方次の山、ワスカランへの出発準備のため忙し一日であった。

二十三日午後、先発隊として私とポーターのモラレスとが荷物と共にトラックに乗って出発。夜行のバスで、加藤副隊長、牧野、朝日、山本の四隊員が出発し、二十四日の夜行バスでは加藤隊長、曾我隊員、エンリケ君の三人が出発した。

車はリマから北へパン・アメリカン道路二〇〇余キロ走ってから内陸へと入っていく。パン・アメリカン道路を離れると道は急に悪くなってしまう。リマから約五〇〇キロ、アンカシュ県の中心の町、ワラスに着いたのは翌日、午前十時頃であった。さっそく、谷

ベースキャンプの夜

この悪天候がしばらく続いて、登頂不可能になるのではないかと心配されたが、翌日またいつものような天候に回復したので行動を開始した。一刻も早く登頂しないとせっかくの苦勞も水泡と帰してしまう。

八月三日、第二キャンプへ四人の隊員が入って、翌四日、牧野、曾我両隊員がまだ暗いうちから頂上へアタックするため出発、続いて加藤隊長、山本隊員が明るくなるのを待って出発していった。

このキャラバンでは、デレガードの主人、

サルカントイ峠を越すと、あとは降り一方である。谷が広く明るく、道も思ったより広く作られていて気持ちが良い。昼にはワイラマチに着いた。アリエロのデレガード一家が住んでいるのだが非常に広大なバンパを持ち沢山の牛を放牧している。家中の人が出てきて、昼食を出してくれた。





ムーラに荷物を積むアリエロ

川さんの家へと荷物を運び込んだ。
 ワスカランはコルディエラ・ブランカ山群にあり、ペルー・アンデスの中の最高峰である。二つの峰があり、南峰(六六七八呎)北峰(六六五五呎)と呼んでいる。
 アンカシユの中心、ワラスの街からも眺められ、その大きさは他の追隨をゆるさない立派な貫録をもっている。
 私達の隊はビルカバンバの山では、より困難な登攀を目的として登ったのであるが、このワスカランではより高度を経験したいという念願であった。この時期(八月下旬)で、ニュールートは無理であるから、ノーマルルートの登攀になる。しかし、高所順応ができていことから、安全でより短期間で登頂することを目標にした。

八月二十五日朝、全隊員の到着を待って、ワスカランの麓の部落、ムーシヨへと向ったワスカランでは、ポーターのモラレスを解雇して、ビクトリーノを雇うことにした。ポーターが若くてあまり働かないからである。
 八月二十六日、十四頭のブーロ(ロバ)に荷物を積んでムーシヨを出発、ベースキャンプへと向った。ベースキャンプは四五〇〇呎森林限界の上、氷河でけずられた岩壁の下部

に張る。
 八月二十七日、私と副隊長が工作隊として夜も明けやらぬ、午前五時ベースキャンプを出発した。ベースキャンプから氷河の取り付きまで尾根筋に踏まれた路を一〜一時間半登る。氷河の下部は無数のクレバス地帯を右へ回ったり左へ行ったり、ルートファインディングに苦勞しながら登る。日が昇るにつれて、暑さがひどく、カッターシャツの袖をまくり上げて、全身汗にまみれながら登る。クレバス地帯をぬけて、五二〇〇呎の雪の広い斜面に第一キャンプを設営した。すぐ下方には、今年アメリカ隊が入った、テント跡がみられる。調べてみた結果、ガソリンが使用できるので回収してやる。第一キャンプには二人が入って、他の隊はベースへと下って行った。二十八日は、南北峰のコル下の第二キャンプ予定地までルート作業をする。ときどきアメリカ隊の標識が見えるのでだいぶ楽であった。コル直下のセラック、大クレバス地帯に入ってアメリカ隊と別のルートをししばらく通って、アメリカ隊のルートにもどる。こゝでスノーブリッジを渡っているうちに、スリップして三層程下のスノーブリッジに転落して危うく止まることができた。体の下はスッパリ切れて大きなクレバスが口を開けている。そろそろと体を動かしてスノーブリッジが落ちないようにしようやく上へあがることのできた。どこにもケガはなかった。

第一キャンプは六人になった。二十九日はいよいよ第二キャンプ設置である。コル直下五九〇〇呎地点にテントを張り、私と副隊長が入幕する。
 八月三十日、朝五時第二キャンプを後にする。いよいよ最高峰、ワスカラン南峰に向けてアタックである。ベースキャンプ建設以来四日である。
 コルから一ピッチ、水平に延びた大クレバス地帯で、ルートを間違えて大分時間をくってしまった。天候も悪く、正常なルートを見

つけるのに苦勞をする。尾根筋の上下の雪壁に挟まれた雪の急斜面を斜にトラバース気味に登っていく。長い長い雪の斜面を登りきって、だぶだぶ広い斜面に出る。傾斜はゆるくなつて頂上へと続いていく。悪天候と高度の影響や疲労が重なって、ピッチが上がらない。ついに六五〇〇呎の地点に雪庇を見つけて、その下にもぐり込んだ。風雪ははっきりなしに続いて、ツェルトの中にまで吹き込んでくる。長い一夜が明けて、七時半ツェルトから飛びでて、頂上へと向った。昨夜第二キャンプへ入った隊長、牧野、山本隊員は北峰へと向っている。頂上直下の急斜面に三つの黒い点が見える。午前九時半ようやく南峰の頂上に立つことができた。風が強く非常に寒いので二、三分程下山にかゝる。
 下降には前日の降雪が小さな表層雪崩を起し、数回雪崩に巻き込まれたが、無事第二キャンプへ戻ることができた。
 北峰隊は十時半に頂上に立つことができ、五日間の短時日のうちに、ペルー・アンデス最高峰のワスカラン南北峰を征服することができたのである。

つけるのに苦勞をする。尾根筋の上下の雪壁に挟まれた雪の急斜面を斜にトラバース気味に登っていく。長い長い雪の斜面を登りきって、だぶだぶ広い斜面に出る。傾斜はゆるくなつて頂上へと続いていく。悪天候と高度の影響や疲労が重なって、ピッチが上がらない。ついに六五〇〇呎の地点に雪庇を見つけて、その下にもぐり込んだ。風雪ははっきりなしに続いて、ツェルトの中にまで吹き込んでくる。長い一夜が明けて、七時半ツェルトから飛びでて、頂上へと向った。昨夜第二キャンプへ入った隊長、牧野、山本隊員は北峰へと向っている。頂上直下の急斜面に三つの黒い点が見える。午前九時半ようやく南峰の頂上に立つことができた。風が強く非常に寒いので二、三分程下山にかゝる。
 下降には前日の降雪が小さな表層雪崩を起し、数回雪崩に巻き込まれたが、無事第二キャンプへ戻ることができた。
 北峰隊は十時半に頂上に立つことができ、五日間の短時日のうちに、ペルー・アンデス最高峰のワスカラン南北峰を征服することができたのである。

つけるのに苦勞をする。尾根筋の上下の雪壁に挟まれた雪の急斜面を斜にトラバース気味に登っていく。長い長い雪の斜面を登りきって、だぶだぶ広い斜面に出る。傾斜はゆるくなつて頂上へと続いていく。悪天候と高度の影響や疲労が重なって、ピッチが上がらない。ついに六五〇〇呎の地点に雪庇を見つけて、その下にもぐり込んだ。風雪ははっきりなしに続いて、ツェルトの中にまで吹き込んでくる。長い一夜が明けて、七時半ツェルトから飛びでて、頂上へと向った。昨夜第二キャンプへ入った隊長、牧野、山本隊員は北峰へと向っている。頂上直下の急斜面に三つの黒い点が見える。午前九時半ようやく南峰の頂上に立つことができた。風が強く非常に寒いので二、三分程下山にかゝる。
 下降には前日の降雪が小さな表層雪崩を起し、数回雪崩に巻き込まれたが、無事第二キャンプへ戻ることができた。
 北峰隊は十時半に頂上に立つことができ、五日間の短時日のうちに、ペルー・アンデス最高峰のワスカラン南北峰を征服することができたのである。

つけるのに苦勞をする。尾根筋の上下の雪壁に挟まれた雪の急斜面を斜にトラバース気味に登っていく。長い長い雪の斜面を登りきって、だぶだぶ広い斜面に出る。傾斜はゆるくなつて頂上へと続いていく。悪天候と高度の影響や疲労が重なって、ピッチが上がらない。ついに六五〇〇呎の地点に雪庇を見つけて、その下にもぐり込んだ。風雪ははっきりなしに続いて、ツェルトの中にまで吹き込んでくる。長い一夜が明けて、七時半ツェルトから飛びでて、頂上へと向った。昨夜第二キャンプへ入った隊長、牧野、山本隊員は北峰へと向っている。頂上直下の急斜面に三つの黒い点が見える。午前九時半ようやく南峰の頂上に立つことができた。風が強く非常に寒いので二、三分程下山にかゝる。
 下降には前日の降雪が小さな表層雪崩を起し、数回雪崩に巻き込まれたが、無事第二キャンプへ戻ることができた。
 北峰隊は十時半に頂上に立つことができ、五日間の短時日のうちに、ペルー・アンデス最高峰のワスカラン南北峰を征服することができたのである。

つけるのに苦勞をする。尾根筋の上下の雪壁に挟まれた雪の急斜面を斜にトラバース気味に登っていく。長い長い雪の斜面を登りきって、だぶだぶ広い斜面に出る。傾斜はゆるくなつて頂上へと続いていく。悪天候と高度の影響や疲労が重なって、ピッチが上がらない。ついに六五〇〇呎の地点に雪庇を見つけて、その下にもぐり込んだ。風雪ははっきりなしに続いて、ツェルトの中にまで吹き込んでくる。長い一夜が明けて、七時半ツェルトから飛びでて、頂上へと向った。昨夜第二キャンプへ入った隊長、牧野、山本隊員は北峰へと向っている。頂上直下の急斜面に三つの黒い点が見える。午前九時半ようやく南峰の頂上に立つことができた。風が強く非常に寒いので二、三分程下山にかゝる。
 下降には前日の降雪が小さな表層雪崩を起し、数回雪崩に巻き込まれたが、無事第二キャンプへ戻ることができた。
 北峰隊は十時半に頂上に立つことができ、五日間の短時日のうちに、ペルー・アンデス最高峰のワスカラン南北峰を征服することができたのである。



サンタテレサの子供たち

博物館だより

武田睦男隊員帰国

本年の五月より愛知岳連の補強隊員としてアンデスのサルカントアイ・ソライ峰等の遠征にかけていた武田睦男調査員(新日本技術コンサルタント勤務・大町山の会員)は去る十一月十四日帰国した。
 明年春にはこれ等の山々の写真展を開催する予定である。

お願い 「山と博物館」の購読者をつのつております。年間三〇〇円(送料共大町山岳博物館宛お送り下さい。(切手は不可)
 (郵便番号三九八)

表紙説明

ホシガラス (爺方岳にて)
 撮影 斉藤忠彦

山と博物館 第13巻第11号
 一九六八年十一月二十五日発行

発行所 長野県大町市TEL大町②〇二一
 大町山岳博物館
 印刷所 大町市下仲町
 大糸タイムス印刷部

定価 年額 三〇〇円 (送料共)